

同性愛者のセクシュアリティ

—研究の視点と展望—

有馬 將太
園田 直子

要 約

本論文はこれまで行われてきた同性愛者のセクシュアリティに関する先行研究をレビューするとともに、散乱している各研究の知見を整理することを目的としている。先行研究は大きく3つの視点に分けることができる。ひとつは同性愛者自身に焦点を当てた“アイデンティティの視点”，ひとつは同性愛者を取り巻く環境に焦点を当てた“ジェンダーの視点”である。そして最後のもっとも重要な視点は，“セクシュアリティの視点”である。この“セクシュアリティの視点”から行われた研究はほとんど存在せず、今後の展望が期待される。

Keyword : Sexuality Identity Gender homosexuals

はじめに

『世間の言う「ホモ」であるという発想はなかった。「ホモ」というのは人をからかったりバカにしたりする言葉という認識はあったが、まさか、自分がその対象であるなんて夢にも思わなかったのだ。(中略)。しかし、学年が進むにつれて、自分の気持ちはその「ホモ」であるということがわかってきた。そしてそれは「同性愛」であるということも。そして決して誰にも言えない秘密を抱えてしまったと、一人で悩んだ』
石川大我 (2003) ボクの彼氏はどこにいる? P49

これは同性愛者同士の出会いをサポートするピア・フレンズという企画を運営している石川大我氏のエッセイ、「ボクの彼氏はどこにいる?」の中に書かれている、同性愛者であることを自覚した瞬間の描写である。このように同性愛者は、程度の差はあれど、自らが同性愛者であることを自覚した瞬間その事実衝撃を受けることになる。そしてそれはそのまま、現在の社会における同性愛者の立ち位置や扱いを表していると言える。

現在の社会では同性愛者の存在は認められているも

の、身近には存在していない、もしくはメディアの中だけの存在であるかのように認識されている。そうした社会の中で、自己の同性愛性を自覚したばかりの同性愛者の多くは、上述したような悩みを抱えるようになってしまう。そのため自分の性的指向が同性愛であることを受け入れること、すなわちセクシュアリティの受容が第一の課題とされている。

セクシュアリティとは

セクシュアリティ (sexuality) という言葉を辞書で引くと、「1. 性的特質・性別 2. 性欲・性的関心」と記されている (リーダーズ英和辞典第2版)。もっとわかりやすく言うなら、人間の性的欲求や性行動、性に関わる人間関係における感情や行動のすべての概念がセクシュアリティという言葉で表わされる (村瀬, 1996)。このように非常に広義な言葉であるため、「同性愛者」の定義と同様にその意味を限定しておく必要があるだろう。

本論文において「セクシュアリティ」は「性的指向および性的指向に関わる感情や態度」を意味する言葉として用いる。また同性愛者のセクシュアリティとは同性愛という性的指向と、同性愛であることに起因して生じる感情や同性愛であるために取る行動を表す。

たとえば“同性愛であることに起因して生じる感情”とは、同性に対する恋愛感情はもちろん、性的興味や性的興奮も含まれる。また“同性愛であるために取る行動”とは同性との性的接触や自分が同性愛であることを隠そうとする行動を指す。

セクシュアリティの受容と統合

セクシュアリティという言葉を上記のように定義すると、同性愛者におけるセクシュアリティの受容とは“自分の行動や感情が同性愛であるということを認め受け入れること”、つまり自己を同性愛者であると定義することだと言える。“自分が同性愛者かもしれないと思いついた同性愛者は自分が何者かわからなくなる (Cass, 1984)”と言われている。そう考えれば自分が何者であるのか定義することが第一の課題とされるのも当然のことと言える。

しかしセクシュアリティの受容ができてしまえばそれですべてが解決するわけではない。むしろ受容できてしまったからこそ、生じてくる問題の方がはるかに多い。家族や友人との関係、結婚、就職など、人生に係る多くの事柄において同性愛者であるということは大きな弊害となってくるだろう。そうした状況のなかで同性愛者は自分らしい生き方を選びとらなければならない。自分らしい生き方とは、決して同性愛者であることを公言し誰もが同性愛者だと認めるように振舞うことではないことを明確にしておきたい。自分らしい生き方とは“同性愛者であるということを受け入れたうえで、同性愛者として自分なりに納得のできる生き方”と定義する。こうした自分らしい生き方を選びとることを、本論文の中ではセクシュアリティの統合と呼ぶ。このセクシュアリティの統合が同性愛者の第2の課題と言えよう。

この2つの課題を越えて、同性愛者がセクシュアリティを受容し統合することをサポートする方法を探るため、これまで様々な立場からアプローチが行われてきた。個々の研究結果はどれも有意義なものではあるが、現状ではそれぞれの研究が独立しており、相互に引用しあうことも稀であり、研究同士のつながりが希薄であると言える。そこで本論文では、先行研究を“セクシュアリティの受容および統合を達成するためには何が必要か”という視点からまとめることにより、今後行われるべき研究を展望することを目的とする。

1. 同性愛者とは

(1) 本論文における同性愛者の定義

“どこからか(あるいはどこまでか)同性愛か”を定

義するのが非常に困難であるため、「同性愛者」という言葉を定義するのは難しい。そのため研究によって対象としている同性愛者の定義は違っている。同性と性的接触を過去に一度でも持ったことがあれば同性愛者とする研究もあれば自身を同性愛者と思うものを同性愛者としているものもある(石丸, 2004)。そもそも多くの研究は同性愛者の定義について言及していない。同性愛者について述べる以上、同性愛の定義を明確にしておく必要があるだろう。

Money (1979) は同性愛者を“外部性器の解剖学的な形態が自分自身と同じ人間に対するエロティックな反応(同性に対する恋愛感情や性的ファンタジーを含む)を示すもの”と定義している。これが現在もっとも支持されている同性愛の定義である。しかしこの定義では性自認については言及していない。自身の性自認になんらかの違和感を抱えているものは同性愛者ではなく性同一性障害である可能性があるため、性自認に違和感があるかどうかははっきりと区別して定義すべきであろう。また異性とも性的接触を望むものはそれを望まないものとはホモフォビク(同性愛嫌悪)な体験に対する感じ方や対処に違いがあると考えられる。したがって「同性愛者」を対象に研究を行う場合、これも明確に区別する必要がある。以上を踏まえ、ここでは同性愛者を「自身の性自認に違和感がなく、同性とのみ性的な関係を望むもの」と定義する。また同性との性的な関係を望むものでも異性と性的接触を行うものは両性愛者と定義し、同性愛者とは区別する。

(2) 同性愛者はどれくらい存在するのか

同性愛者に限らずセクシュアルマイノリティは“見えない存在”だと言われている。これは人種や民族的なマイノリティと違いセクシュアルマイノリティは外見からの判断がつかないためである。実際に身近に同性愛者がいると思わないものの方が圧倒的に多いだろう。同性愛者はいったいどのくらいの割合で存在しているのだろうか。セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク(2003)によると、1998年にカナダで行われた18歳から27歳までの男性を対象とした調査では5.9%が“自身を同性愛者だと思う”と回答している。アメリカの全人口の10から15%が同性愛者であるという説もある(Walters & Simoni, 1993)が、Marcus (1997) はアメリカ国内に何百万の同性愛者がいること確かだがこの数字は大きすぎると述べている。また日本でも藤澤ら(1994)が日本の五大都市で調査を行っているが、1968名の中で20%の男女が“同

性に対して性的にひかれたことがある”と回答し、そのうち実際に“身体に触れあったことがある”のは全体の10%であった。ここで挙げていない調査も含め、過去の同性との性的な接触の経験が主な調査の対象であるため、全員が本論文で定義する「同性愛者」とは言えない。正確な数字を知ることはできないが、国や都市を選ばずに同性愛者が存在していることは明らかである。ちなみに日本では同性愛者の割合は約3パーセント前後、少なくとも50人に1人という説がもっとも支持されているようである(石川, 2002; 伊藤, 1996; 梶谷 2008 など)。

2. 同性愛者のセクシュアリティ受容と統合の研究

(1) これまでの研究の視点

心理学における同性愛者の研究は大きく分けると2つの視点から行われてきた。ひとつは同性愛者のアイデンティティに注目した視点である。この視点は同性愛者をセクシュアリティを統合していくために社会や他者に働きかける主体として捉え、同性愛者自身の自己観の変化に特に焦点を当てている。またネガティブな自己観をポジティブな自己観へと変化させていく要因として同性愛者の社会的スキルに注目している。もうひとつはジェンダーの視点である。こちらは同性愛者を社会のジェンダー規範に縛られ抑圧されている客体と捉えている。この視点では社会、特に学校文化における異性愛主義とジェンダー規範が同性愛者のセクシュアリティの統合を阻害するとし、教育制度の見直しを目的としたものが主である。

①アイデンティティの視点

アイデンティティの視点から行われた調査・研究の先駆けとも言うべきものが、Cass (1984) や Troiden (1979, 1989) の提唱したアイデンティティの形成段階モデルである。

同性愛アイデンティティに関してはもとより否定的な同一性の形成であるとする考え方 (Gonen, 1971) とアイデンティティの形成に成功したとする考え方 (Hammersmith, 1973) と賛否両論であったが、昨今では後者の考え方で捉える向きが強い。Cass や Troiden の段階モデルもアイデンティティ形成の成功として捉えて作られている。ここではより適切でわかりやすい Troiden のモデルを用いる。ちなみに Cass の提唱した6段階モデルは Troiden の4段階モデルと対応しているため、詳しい説明は省略する(図1参

照)。

Troiden の同性愛アイデンティティ発達モデル

Troiden の発達段階モデルは、同性愛者が自己の同性愛性を自覚する以前から始まっている。この時期を“鋭敏化 (sensitization)”という。この段階は主に思春期以前の段階であり、当然この段階にある同性愛者は自分が同性愛者であるという自覚もなければ、同性愛を自分にかかわりのある事柄とも捉えていない。しかしこの段階で学んだ知識や経験が後に自分が同性愛者であると気づく土台となっている。つまり同性愛者という自己定義に向けて鋭敏化しているのである。

次の段階は自分の思想や行動が同性愛的であることと自己イメージが不協和を起こす“アイデンティティの混乱 (identity confusion)”の段階である。この段階は思春期にあたり、Cass のモデルにおける第1段階と第2段階に対応している。異性愛者としての同一性は持ち得ないが、同性愛者としての同一性も形成されていない時期で、否認や回避といった混乱に対する防衛反応が見られる。

第3段階は“アイデンティティの受容 (identity tolerance)”である。これは Cass の第3段階と第4段階に対応している。この段階は自己をとりあえず同性愛者と定義し、同性愛者としての活動を行う時期とされている。またこの段階の特徴に他の同性愛者との定期的なかかわりと同性愛文化の探索が挙げられており、同性愛者として社会に適応するための様々な試みがなされたり適応スタイルが構築される時期だとも言われている。

そして第4段階が同性愛を人生の在り方として採用している“コミットメント (Commitment)”の段階である。この段階は Cass の第5段階と第6段階に対応する。同性愛者として生きることに満足し、自ら選択的に生きている時期とされており、自己定義から約

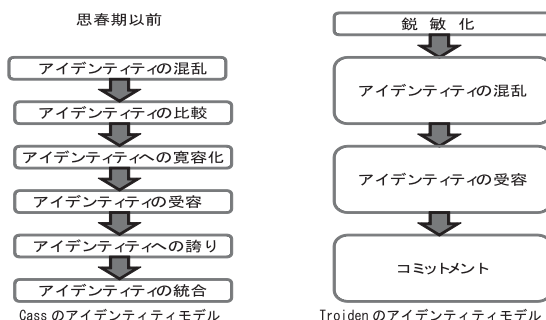


図1 アイデンティティの形成段階モデル

2年から5年の歳月を経てこの時期に達するとされている。

以上が Troiden の同性愛アイデンティティの形成段階モデルである。このモデルが提唱されてから実に20年以上の歳月がたっていることを考えても、このモデルのすべてが正しいとは考え難いが、現在あるモデルの中でもっとも妥当な統合的なモデルであると考えられる。

この形成段階モデルはその後のアイデンティティの視点から行われた研究に多く引用されている。たとえば堀田（1998）は同性愛者の男子大学生の同性愛アイデンティティ形成と次の段階への移行をサポートする心理面接のあり方を提案している。また Walters & Simoni（1993）は黒人のグループアイデンティティの発達を測るために作られた Racial Identity Attitude Scale（以下 RIAS）を同性愛者用に改定し、同性愛アイデンティティの測定を行った。その結果同性愛者のグループアイデンティティの発達は黒人のそれとよく似た過程をたどると報告している。アイデンティティに関する全ての研究が Cass や Troiden のモデルを引用しているわけではないが、その後の発展に与えた影響は大きい。

発達モデルを使用していない研究としては、小宮（2001）は同性愛の子どもが直面する問題を「自己受容の困難」「自己開示の困難」「自己イメージの困難」「事故回避の困難」の4つにまとめている。

アイデンティティの視点は石井（2009）が女性同性愛者を対象とした研究の中で“私”に関する研究である”と表現しているように、私的な問題やその解決に焦点をあてたものである。しかし性に関わる事柄を研究することは単に人間の性的活動の探求にとどまらず、それについて規定する社会についても研究しなければならない（石井 2009）。また上野（2008）は従来の社会規範を問い続ける姿勢こそが大切なのだと述べている。そうした観点から行われたのがジェンダーの視点である。

②ジェンダーの視点

ジェンダーの視点は、現在の日本社会が異性愛の子供の存在のみを前提とし同性愛の子供の存在をないものように扱っていること（異性愛主義）を主な問題とし、環境や社会制度、教育制度などの改善を目指すものである。この視点から行われる研究は多くは学校文化のもつジェンダー規範を問題として取り上げている。たとえば渡辺（2005）は、学校という空間が同性

愛者のさまざまな関係性を排除してしまうため、彼らが必然的に学校の外へ関係づくりを求めなければならないこと、そのため彼らが“学校離れ”していくことを明らかにし、学校空間の持つ異性愛中心主義的な政治を暴かなければならないと述べている。小宮（2000）は高校生の男性同性愛者の投稿テキストの分析から彼らが直面している困難の実態を明らかにし、異性愛主義を包含している既存のジェンダー規範が同性愛者の子どもにとって抑圧的であると述べている。また杉山（2006）は全ての高校生の性的気づきと性の自己決定を促すセクシュアリティ教育を定期するため、高等学校における同性愛者の自己形成過程を当事者への聞き取り調査を中心に分析している。この中で杉山は、小宮（2001）がまとめた同性愛者が直面する4つの困難には「情報アクセスの困難」が欠けていると述べている。「情報アクセスの困難」とは同性愛者にとって有用な情報へのアクセスと他の同性愛者との出会いの難しさを表しており、社会に焦点を当てるジェンダーの視点ならではの発想と言える。

③両視点の問題点

これら2つの視点から行われた研究は、いずれも同性愛者以外を対象にしても似たような結果が得られるだろう。同性愛者が他のマイノリティと最も異なる点は“性的欲求を向ける対象が同性愛である”ということである。よって同性愛者を研究するのであればもっと性的な部分にこそ目を向けるべきである。しかし上記の2つの視点には、同性愛者が性的活動を行う主体であるということが抜けている。今後の同性愛者のセクシュアリティの統合の研究にはそうした視点が必要だろう。本論文ではこれをセクシュアリティの視点と呼ぶ。

3. セクシュアリティの視点

（1）セクシュアリティの視点とは

同性愛者のセクシュアリティの統合を、彼らの性的指向を中心に研究しようとするのがセクシュアリティの視点である。すなわち「同性愛という性的指向と同性愛であることに起因して生じる感情や同性愛であるために取る行動」に焦点を当てて研究を行う視点である。わかりやすく言うならば、これまで行われてきたアイデンティティ・ジェンダーの視点の研究をもっと同性愛者特有の問題に焦点を当てて行うということである。

セクシュアリティの視点からは次の3つの点に注目

することができる。

①性的活動の問題

ここでいう性的活動とは実際の性交渉はもちろんのこと、そこに至るまでの活動（どんな相手に性的欲求をもつか・どのようにして相手を探すのか・時間や場所のセッティングなどをどのように行うか）を指す。これは“性シナリオ”や“性スクリプト”と表現される（佐藤（佐久間），2007）こともあるが、ここではあえて性的活動と表現する。

言うまでもなくこれらのことは異性愛者であれば意識せずとも自然と学習され、いざ実行するときにもさほど苦勞をすることはない。しかし同性愛者はこれらのことを自らの意思で探索し学習せねばならない。またいざ実践しようとするばさまざまな困難に直面することになるだろう。これは同性愛者を研究する上でもっとも重要でありながら、今まで扱われてこなかった問題である。同性愛者がマイノリティとされる一番の特徴は同性に性的な欲求を抱くことである。よって同性愛者の性的活動に注目することは重要な意味を持つだろう。

②関係性の問題（カミングアウトの問題）

第2に友人や家族といった親しい他者との関係性の問題である。同性愛者は同性の友人と安定した関係を築くのが難しい。異性愛者であれば異性に性的欲求を抱き同性と友人関係を築く。しかし同性愛者は同性に性的欲求を抱くため友人関係になれなかったり、同性愛者であることが明るみに出たとき関係が壊れてしまったりする。また家族との関係は思春期には家族から浮いている・外れていると感じることで良好な関係を築けず、成長すれば結婚や子供の問題も出てくる。なにより家族や友人に対して同性愛者であることを隠していることの罪悪感が関係を阻害している。この罪悪感を解消するためには相手に自分が同性愛者であることをカミングアウトしなければならない。しかし“性的トラウマからくる理解してもらえないという強固な異性愛者不信”と“経済的に自立できない生活不安”によって、同性愛者にとってカミングアウトは非常に困難な課題となっている（吉田，2005）。よって他者との関係はカミングアウトの問題とも言えるだろう。

カミングアウトは同性愛者にとって乗り越えなければならない重大な事柄である（Harrison，2003）。にもかかわらず、実はこれまでの研究ではそれほど注目さ

れていない。Harrisonが行った調査では同性愛者が家族へのカミングアウトを決意する理由とそれに対する家族の反応については述べられているが、その成否が同性愛者自身に与える影響については明らかにされていない。他の調査も家族の反応の内訳を述べただけで終わってしまっている（Augelli et al, 1998；Merighi & Grimes, 2000など）。これらの調査ではほかに姉妹に対してのカミングアウトがもっとも多く、父親よりも母親にカミングアウトされやすいと言われている。また同性愛者の他者への開示と非開示の状況を調査した梶谷ら（2007）の報告では家族よりも友人に開示されやすいと言われている。このことからカミングアウトの対象選択に階層性のようなものがあると考えられるが、それも深くは考察されていない。カミングアウトの成否が同性愛者に与える心理的影響やカミングアウトをする対象の選択順位など、カミングアウトの問題はこれからの研究に欠かせない問題である。

③世界の二重構造化（同性愛者の世界、異性愛者の世界）の問題

そして最後に、同性愛者の存在する世界の二重構造化の問題があげられる。同性愛者に対する聞き取り調査を行った先行研究を概観すると、同性愛者は一般的な社会を異性愛者の社会、同性愛者のみの存在する世界を同性愛者の世界と呼んで区別している（福田サトウ，2008；Isay，1996；石丸，2008；杉山，2006；渡辺，2005ほか）。これは学術的な研究のみに見られる傾向というわけではなく、同性愛者の記したエッセイなどでもこうした表現は使われている。たとえば大塚（2009）の『二人で生きる技術』の中では昼間の異性愛者に溶け込んで過ごす時間を“昼の世界（昼の顔）”、夜の同性愛者として自分らしくいられる時間を“夜の世界（夜の顔）”と呼んで区別している。このように同性愛者の語りの中では同性愛者として自分らしくいられる“同性愛者の世界”と社会規範にのっとり社会的に望ましい役割と態度を装う“異性愛者の世界”とが区別して語られる。

こうした同性愛者の世界の二重構造化にはどのような意味があるのだろうか。ひとつには異性愛者との関係性における防衛と自己の修復の機能と言えるだろう。“異性愛者の世界”は同性愛者などいないものさされていて、その中で同性愛者は自分の思いや感情を隠さねばならなかったり否定的なことを言われたりするなど、窮屈で不愉快な思いを強いられている。そうし

た環境の中にあつては同性愛的な部分を隔離し完全に異性愛者になりきることによって自己を守っていると考えられる。一方“同性愛者の世界”はそこに居る者すべてが同性愛者であることを前提としており、同性愛的な態度や感情がすべて当たり前のこととして受け入れられる。石川（2003）はこれを“自己肯定のシャワー”と表現しているが、日頃否定的な環境の中にいる同性愛者は“同性愛者の世界”に居ることではげまされ、自己肯定を促進される。

“異性愛者の世界”で窮屈な思いをしている同性愛者にとって、なにも隠す必要のない“同性愛者の世界”は居心地のいいことだろう。ともすれば“同性愛者の世界”への比重が高まるのは自然なことだろう。しかしあまりにも“同性愛者の世界”に依存してしまえば“異性愛者の世界”での現実味が薄れ、行き過ぎれば過度な異性愛者嫌悪にもつながる。それはすなわち“異性愛者の世界”に含まれる家族や友人、学校などからの乖離を招く。

同性愛者の世界の二重構造化はこれまでの先行研究でもたびたび見られた問題ではあるが、これまで重要視されてこなかった。世界の二重構造化は同性愛者と社会のつながりや、同性愛者そのものを表す大きな特徴であるので、今後の研究でも注目すべきだろう。

（2）同性愛者を対象とする研究の困難さ

セクシュアリティの視点から同性愛者を研究することは非常に重要であるが、実際にそれを行うことは容易ではない。そこには主に3つの大きな困難がある。

①同性愛者にアクセスすること

第1の困難は言うまでもなく、調査対象が同性愛者であるということである。これは異性愛者を対象とする研究と比較して大きなハンディキャップと言えよう。マイノリティと称されるように、同性愛者は異性愛者に比べて圧倒的に数が少ない。そのため同性愛者だという人を探したり協力者の中から選び出さなければいけないのだが、一部の場合を除いて見ただけで同性愛者であるかどうかを判断するのは難しく、また同性愛者かどうか尋ねても必ずしも正直な回答が得られるわけではない。同性愛者を対象とした研究を行おうとするのであれば、まず同性愛者にアクセスできるようにしなければならない。この問題を解決するもっとも簡単な方法は同性愛者の集まるグループやサイトにアクセスすることである。そういった場であれば参加者は同性愛者であることが前提となっているため、探すまで

もなく同性愛者にコンタクトを取ることができる。しかしたとえコンタクトを取ることができたとしても、すべての問題が解決するわけではない。次に同性愛者特有の閉鎖性が大きな壁となる。

同性愛者専用の情報サイトや SNS の多くは紹介制を導入していたり異性愛者のアクセスを拒否する注意書きを掲げている。これは同性愛者同士が安心して交流するためには避けがたい方法ではあるが、これにより同性愛者以外との交流が制限されてしまっている（渡辺，2000）。これは同性愛者個人でも同じことが言える。多くの同性愛者は親しい友人や家族以外の異性愛者との交流は避けており、一部は異性愛者を嫌悪すらしている。つまりせっかく同性愛者とコンタクトが取れたとしても、実際に会うことはおろか研究に協力してもらうこと自体難しい可能性が高い。この問題は研究に協力してもらおうと思う同性愛者に信頼されるだけの関係性をきづくことでしか解決できない。実際に研究を行うのであれば、関係作りまでを含めた長い時間を要することになるだろう。

②研究者のセクシュアリティが影響すること

大多数の研究は研究者のセクシュアリティが影響するようなことはまずない。しかし同性愛研究に限っては研究者が同性愛者であると明らかにされている場合とそうでない場合（この場合は異性愛者であると判断される）では研究結果にかかるバイアスが変わってくる。これが第2の困難である。たとえば研究者が同性愛者であると明らかにされている場合は研究目的に沿った回答をしようとする好意的なバイアスがかかる可能性があるし、そうでない場合には逆に研究目的に反した回答をされてしまう可能性もあるし、そもそも回答をしてもらえないことも少なくないだろう。

質問紙調査だけでなく面接でも同じようなバイアスがかかると考えられる。これは「語り」の持つ性質だが、誰が語るのかだけでなく、誰に向けて語るのによっても語りの内容が変わってしまうことである（上野，1998）。これを同性愛研究に置き換えて言うなら、研究者（聞き手）が同性愛者かそうでないかによって語りの内容が変わるということになる。それはすなわち、研究者が異性愛者である研究はもちろん、同性愛者である研究もそれぞれ協力者に語られない部分があるということである。

ではそうしたセクシュアリティに係るバイアスを低減するためにはどうすればよいのだろうか。一番理想的な形は研究者（もしくは調査実施者）に異性愛者と

同性愛者の両方が関わっていることである。こうすればそもそも研究目的や研究の意義がどちらかの主観に偏ることも避けることができるだろう。先行研究において異性愛者と同性愛者の両方が研究者として関わっているものはまだ見受けられない。当事者の研究者が少ない現状の中で簡単なことではないが、研究結果の精度を上げるためにも、より多くの結果を得るためにも必要なことである。

③性的な内容を取り扱うこと

最後の障害は“性的なことの繊細さ”と言えるかもしれない。これは同性愛研究に多くみられる面接などによる事例研究に特に当てはまるものである。

セクシュアリティの視点は上記したように調査対象のプライバシーのなかでも、特に性的な内容に触れることになる。しかし性的なことを語ることは友人同士のいわゆる下ネタならともかく、心理的に防衛を働かせ、場合によっては苦痛を伴うこともある。そのうえで協力者に語ってもらおうとするのであれば、研究者はその研究の目的と意義を明確に示す必要があるだろう。また話すに値すると思われなければ、有益な語りを引き出すことは難しいだろう。

4. セクシュアリティの視点以外の研究

これまで見てきたとおり、先行研究では“セクシュアリティの視点”が大きく欠けている。よって“セクシュアリティの視点”に立った研究が今後行われるべきである。しかし“セクシュアリティの視点”以外にもいまだ行われていない、もしくは知見の少ない部分がある。最後にそうした研究を挙げておこう。

女性同性愛者の研究

男性同性愛者の研究に比べて、女性同性愛者を扱った研究は非常に数が少ない。これは男性同性愛者以上に女性同性愛者にアクセスすることが難しいというものの理由の一つとして考えられるが、そもそも女性の同性愛的欲望が認知されにくい(杉浦, 2009)という社会的事実に原因がある。もともと女性に性欲があるという事実でさえ受け入れられにくいことから、それが同性に向けられるということはなおさらであろう。そうした社会的背景の中で、もしかすると男性同性愛者以上に女性同性愛者は窮屈な思いを強いられているかもしれない。

当事者以外の研究

同性愛者のセクシュアリティの受容も統合も、当事者だけで行われるものではない。彼らを取り巻く周囲

の人々との相互作用によって行われていくのである。とりわけもっとも身近な他者である家族や友人の同性愛者に対する態度の影響力は無視することができない。同性愛者を研究しようとする、まず当事者に目が向いてしまうものではあるが、彼らの家族や友人の態度や行動を研究することにも同じくらいの価値があるだろう。ただし家族や友人にアクセスすることは当事者以上に困難なことだと考えられるので、実際にアプローチをする際には十分に準備をする必要がある。また研究後のケアも考慮するべきだろう。

ま と め

これまで見てきたとおり、これまでの先行研究は同性愛者の自己観に焦点を当てた“アイデンティティの視点”と、環境に焦点を当てた“ジェンダーの視点”にまとめることができる。これらの視点からしか明らかにできない部分もまだ残っており、その研究上の有用性を否定するものではない。しかし本論文では、同性愛者が同性愛者であることの本質的な部分である性的指向に注目した視点が存在しないことを指摘し、“セクシュアリティの視点”を提言した。この“セクシュアリティの視点”これまで触れられてこなかった性的な事柄にアプローチしていく点で他の視点と大きく異なり、先行研究では明らかにされてこなかった部分を補完する重要な視点であると考えられる。

引用文献

- Augelli AR, Hershberger SL & Pikington NW (1998). Lesbian, gay and bisexual youth and their families : disclosure of sexual orientation and its consequence. *American Journal of orthopsychiatry*, 98(3), 361-370
- Cass C (1979). HOMOSEXUAL IDENTITY FORMATION : A THEORETICAL MODEL. *Journal of Homosexuality*, 4(3), 219-235
- 藤澤和美 宗像恒次 田島和雄 (1996). 日本の青少年の性行為とエイズ認識, 宗像恒次編著 青少年のエイズとセックス, 日本評論社
- 福田茉莉 サトウタツヤ (2008). あるゲイ男性における自らの存在意義の語り～「ゲイ」と「ノンケ」の境界を行き来する当事者の在り方～, *日本パーソナリティ心理学大会発表論文集*, (17), 200-201
- Harrison T(2003).Adolescent Homosexuality and Concerns Regarding Disclosure, *Journal of School Health*, 73(3), 107-112
- 日高庸晴 (2000). ゲイ・バイセクシュアル男性の異性

- 愛者役割葛藤と精神的健康に関する研究, 思春期学, 18(3), 264-272
- 堀田香織 (1998). 男子大学生の同性愛アイデンティティ形成, 学生相談研究, 19(1), 13-21
- Isay R (著) 金城克哉 (訳) (1996). ホモセクシュアルであるということ—ゲイの男性と心理的発達—, 太陽社
- 石井香織 (2009). 女性同性愛者の抱える生活上の問題に対する当事者の姿勢—同性パートナーと同居する女性のインタビュー調査から—, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(1), 65-76
- 石川大我 (2002). ボクの彼氏はどこにいる?, 講談社
- 石丸径一郎 (2004). レズビアン・ゲイ・バイセクシュアルについて, 心身医学, 44(8), 590-594
- 石丸径一郎 (2008). 同性愛者における他者からの拒絶と受容, ミネルヴァ書房
- 伊藤悟 (1996). 同性愛の基礎知識, あゆみ出版
- 梶谷奈生 (2008). 女性同性愛者のセクシュアリティ受容に関する一考察, 心理臨床学研究, 26(5), 625-629
- 梶谷奈生・横山恭子 (2007). 同性愛者の開示/非開示に対する意識—同居する同性カップルの事例から—, 上智大学心理学年報, 31, 111-118
- Karina L. Walters & Jane M. Simoni (1993). Lesbian and Gay Male Group Identity Attitudes and Self-Esteem : Implications for Counseling, Journal Counseling Psychology, 40(1), 94-99
- 小宮明彦 (2000). ジェンダー規範の一要件としての異性愛主義—同性愛の高校生による投稿文のテキスト分析を中心に—, 日本教育学会大会研究発表要項, 59, 202-203
- 小宮明彦 (2001). 同性愛の子どもの実態に関する覚え書き—ゲイ雑誌のテキスト分析を中心に—, 学術研究 (教育・社会教育・体育学編), 49, 87-104
- Marcus EZ (著) 金城克哉 (訳) (1997). 同性愛を知るための基礎知識, 明石書店
- Merighi JR, Grimes MD (2000). Coming out of families in a multicultural context. Families in Society, 81(1), 32-41
- 村瀬幸浩 (1996). ニュー・セクソロジー・ノート, 東山書房
- 日本性教育協会 (1994). 青少年の性行動: わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告 (第4回), 小学館
- 大塚隆史 (2009). 二人で生きる技術, ポット出版
- 佐藤 (佐久間) りか (2007). 視覚情報とセクシュアリティ—視覚障害者の性概念形成過程に学ぶ—, 大阪府立大学女性学研究センター論集, 14, 52-76
- セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク (2003). セクシュアルマイノリティ, 明石書店
- 杉浦郁子 (2009). 異性愛主義の中の女性の同性愛的欲望, 好井裕明編 排除と差別の社会学, 有斐閣選書
- 杉山貴士 (2006). 性的違和を抱える高校生の自己形成過程—学校文化の持つジェンダー規範・同性愛嫌悪再生産の視点から—, 技術マネジメント研究, 5, 67-79
- Troiden R (1979). Becoming Homosexual : A model of gay identity acquisition, Psychiatry, 42, 362-373
- Troiden R (1989). The Formation of Homosexual Identity, Journal of Homosexuality, 17(1-2), 43-73
- 上野淳子 (2008). 心理学における性的マイノリティ研究—教育への視座—, 四天王寺大学紀要, 46, 73-83
- 上野千鶴子 (1998). ナショナリズムとジェンダー, 青土社
- 和田実 (1996). 青年の同性愛に対する態度: 性および性役割同一性による差異, 社会心理学研究, 12(1), 9-19
- 渡辺大輔 (2000). 同性愛の若者とインターネット—孤立からの脱却と広がる仲間づくり—, 季刊人間と教育, 28, 144-153
- 渡辺大輔 (2005). 若年ゲイ男性の学校内外での関係づくり—学校空間が持つ排除と分断の政治の検討にむけて—, 教育学研究, 72(2), 38-46
- 吉田和子 (2005). 人間の多様な性と変革知への課題—セクシュアルマイノリティの視点—, 岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究, 7, 215-223

Homosexuals' sexuality

— Sights and aview of studies —

SHOTA ARIMA (*Graduate school of psychology, Kurume University*)

NAOKO SONODA (*Department of psychology, Kurume University*)

Abstract

This paper's purposes are to review the precedent studies on homosexuality and to classify those various findings into identical, simplified manner. The prior studies can be categorized into three groups. First one is in the viewpoint of "Identity", and this group focuses on self-image of homosexuals. The second "Gender" group emphasizes on the environmental factors homosexuals face. The last and the most essential group investigates behaviors of homosexuals in terms of "Sexuality", in other words, sexual attraction, sexual behavior, and sexual orientation of homosexuals. The small number of precedent studies has conducted with main focus on sexuality. Thus, this paper will further explore the "Sexuality" aspect of homosexuals as well as compare and contrast with other studies.